

# 村田

# 兆治

「モットーは“人生先発完投”。

いい人生だったと思えるように、  
毎日が限りなき挑戦です」

「苑」この人に会いたい  
元プロ野球選手  
村田兆治さん (59歳)

マサカリ投法の確立、右肘の大手術からの復活、  
サンデー兆治の異名——。  
23年のプロ野球人生を駆け抜け、  
現在は離島の少年野球繁栄に尽力して輝き続ける、  
村田兆治さんに迫った。



# interview 苑

## 努力と向上心で積み上げた実績

1949年、広島県に生まれた村田兆治さんが野球を始めたのは、小学校3年の時。稲刈りが終わった田んぼがグラウンド代わりだった。中学から野球部に入部し、スカウトで福山電波工業高（現近畿大学附属福山高）へ。甲子園への夢は叶わなかったが、1年先輩にいた浅野啓司とともに大活躍し、東京オリオンズ（現千葉ロッテマリーンズ）からドラフト1位指名を受けてプロ入り。4年目には独特のダイナミックなフォームマサカリ投法を完成させて12勝をマークした。

「高校時代から150kmぐらい投げましたね。どこに行くかはわからないけど（笑）。マサカリ投法は、入団から数年かけて改良改善したものです。ドラフト1位で指名されて自信を持って頑張るんですけど、やっぱり壁にぶつかりますよね。こんなもんじゃなかったということに気がついて、改良改善をして軌道修正をしていくと問題解決があるわけです。まだ若かったから、このままで自分のいい部分が続けていくか、もう少しレベルの高位ところを目指すのか選択肢は分かれるけど、一番大切なことは自分で観察できる目や人の意見を聞く耳や考える頭を持つことです。それがどこまで自分を追



いつめて、どうなりたいのか、目標は？  
目的は？つて続いてくるんです。

マサカリ投法は、フォームを覚えても頭で理解して筋力を動かし続けられないといけないですね。頭と体でわかってても、数字もこだわっていかなければならぬ。それでこうすると勝つてこうすると負けるという分析をして、どうモチベーションをもっていかをシステムのようにならしました。マサカリ投法は毎日2000回ぐらい足を上げてやるんです。それは技術の追求です。その後に心臓がつぶれるかと思うぐらい走るんです。それは確



固たる強い意志がないとできないけど、真剣にやらないと自分が求めているものが求められなくなってくるのがプロ野球ですから。目標はまぐれでない、真のエースになることでした。

フォークボールは、1回から9回まで投げ続けられて長く活躍できるフォームを作ろうということで編み出したものです。やっぱり探究して、研究していかないと。物心ついた時から興味を持って小中高と野球を続けて、ライバルたちに勝ってきたわけだけど、今度はプロで活躍していくという向上心があったし、やるか



らには結果を出したかった。結果が出るスポーツですからね。根底には、お客さんから拍手をもらってまた見に来ようって思われるタフなピッチャーになろうっていう思いがありました」

### 再起不能と言われた右肘の故障

74年には日本シリーズ第6戦で勝利投手となって日本一を決め、76年・77年・79年・81年には奪三振王、81年には19勝

で最多勝利を手にするなど、大躍進を続けていた村田さんを、利き腕である右肘の故障という悲劇が襲う。原因不明の故障で、オリオンズのエースとして脂が乗り切っていた33歳の時だった。

「自分が故障するわけがないと思ってました。その根拠というのは、練習量、健康管理、心構えのすべてに計画性があったから。絶望というものがあるんだな、と。手術して3年ぐらい休んで、今まで生きてきた人生は何だったのかって自分を問

い詰めて、自分探しをしなければならなかった。どうしてこんなに弱いんだろうとか肘さえ良ければいいのとか自分の存在感がないとか、死んでしまった方がいいとまで考えました。食欲はなくなるし、人に会うのが嫌になるし、いわゆるうつ病ですよ。ここまで悔いのない生き方をしてきたんだって自分に言い聞かせても、なかなか受け入れられなかった。自分自身を見つめ直すために、何度も山奥に行って滝に打たれたり、座禅を組んだりもしました。その間、社会から離れているのは辛かったですね。心配させないように、家族からも離れなきゃいけなかったし。『頑張ってるね』って言われても、頑張ってることまできたんだからこれ以上頑張れないと思いました。

当時、体にメスを入れてまでカムバックした選手は皆無で、そこまでリスクを背負ってやりたくないというのが当時のスポーツ医学界でした。何度も冷たい滝に打たれて無心になって、最後に自分に言い聞かせたのは、..ゼロから出発してここまでやってきたんだから、一年後二年後にあの時こうすればよかったと思わない悔いのない人生にしよう、最後にひと花咲かせよう」ということでした。それでアメリカに渡り、83年の8月24日にフランク・ジョーブ博士の手術を受けました。左手首の腱を摘出し、右腕に移植



するといふものです。リハビリで伸ばすだけでも三ヶ月、一年後に10mのキャッチボールを一ヶ月、次の一ヶ月で20m、球数は30球から徐々に増やして、40kmぐらい走ったりね。壮絶なりハビリ生活でした」

## エースの復活、惜しまれての引退

ファンをはじめ日本中が待ち焦がれた、復活登板は84年5月13日。川崎球場での西武戦で1イニングを抑え、翌年には1073日ぶりの勝ち星。このシーズンに17勝5敗という成績を取ってカムバック賞を獲得。翌年からは肘への負担軽減

のために登板間隔を空け、日曜日ごとに先発として17勝を挙げ、「サンデー兆治」と呼ばれた。引退を表明した90年も10勝を記録し、惜しまれながらの引退だった。

「リハビリ中、もう一度マウンドに立つて勝ちたい、そこに最後のひと花があるんだろう」という思いのほかに、「経験やここまでの実績を多少なりとも持っているから、帰っても自分の執念があるな」とものすごく感じていました。復帰と復活は違うんです。復帰はリハビリを終えて投げることですが、復活というのはもう一度エースに戻ることでしたから。川崎球場でゼロからのスタートを切って、自分に勝つってこういうことだと初めて思いました。200勝を通過した時は、一時あきらめかけた自分が200勝に達したことを、すごく幸せに思いましたね。故障した時に失った自分の存在感を自分なりに取り戻して、もう一度エースとして戻ってくるのができて、最後の最後まで先発にこだわってやり通したから、思い残すことはなかったです。

終わり方って大事ですよ。最後に、川崎球場で『絶望の日も挫折の日もありましたけど、23年間投げ続けてこられたのはひとえにファンのみなさんのおかげです』って挨拶して、心から「この球団で良かったな」と思いました。トレード問題とかいろんな問題に関わってたくさん

勉強させてもらったし、これからのレールは自分でひいていこうと思えました」

## 離島の少年野球を積極的に支援

引退後は、野球解説者や福岡ダイエーホークス（現ソフトバンクホークス）のコーチを3年間務めた。その後は日本の離島を回り、定期的に少年野球教室を開催。05年には離島のための球団「まさかりドリームス」を創立し、昨年には10自治体の参加のもと国土交通大臣杯全国離島交流中学生野球大会を開催した。

「中標津<sup>なかしづ</sup>で酪農を営んでいるお父さんお母さんから、『離島の小さな島ですけど来てもらえませんか、夢を叶えてください』と依頼を受けたんですね。私は野球を人生先発完投で最後まで投げ出すことなく終わったから、『お金がないんだけど現場に来てほしい』って要請があったらやっぱりそこに行くんですよ。人との出会いを自ら積極的に求めて、自分自身を磨くためにもまずは現場に行かなきゃ。」

日本には約220の離島があつて、離島大会を開催するためにこれまでに50島、計100回ぐらいいきました。経済的な問題や距離のハンデ、子供たちが島を離れざるをえない現実の厳しさはありますが、そこには待っていてくれる子供たちがいるんです。野球を通して、少しでも

# interview 苑

自己PRすることを学んでほしいし、交流することによって新たな絆ができることを伝えたい。自分たちが頑張ってる島に残ると後輩たちも続いて、刺激になるんです。

子どもたちと向き合うのは面白いですよ。島の人間には温かさがあるから、子どもたちが素直なんです。素直だけに、ちょっとしたことを教えて残して、大きくなった時に誇りにしてほしいですね。手抜きで打たせてあげると真剣勝負どっちがいい？って聞くと、みんな真剣勝負がいいって言う。大人になって頑張る人と楽な人のどっちになりたい？って聞くと、頑張る人になるってね。それはこっちも真剣に向き合っていくからですよ」

## 人生は最後まで”限りなき挑戦“

現在村田さんは全国を飛び回り、離島の野球教室や講演会などを精力的にこなす日々を送っている。そんな多忙な毎日でもトレーニングを欠かすことはなく、「毎日ご飯を食べるのと同じ。子どもたちのためにある程度鍛えておかないと」と話す。そんな真摯な姿勢が離島に元気をもたらし、腕の故障やうつ病という地獄も味わって復活した村田さんの言葉が講演でたくさんの人に希望を与えている。『人生先発完投』を貫き通す村田さんに、

今後の夢を聞いてみた。

「人生先発完投というのは、人は誰でも人生という大切なマウンドに立って簡単に降板するわけにはいかない、力の限りを尽くして今後の人生を完投してほしいっていう意味なんです。よく監督業はやらないのかって言われるけど、離島大会をやるって言った以上は先発完投だって言ってる私がいかがいかなことはできないですよ。まずは70歳までが課題ですね。若い時は3年周期で考えた方がいいと思うけど、もう少ししたら5年、50を超えたら10年サイクルでね。50過ぎるとあまり無理はできないから60まで元

気でいることがまず大事。目標を達成したら、ゼロから考えるんです。だから夢っていうと、70までピンピン活躍してるような水準を守っていくこと。いつでも現場に行ける体でね。子どもたちに指示する前に自分が出来なかったら大変なことだから、私も真剣勝負ですよ。

人間は病気になることと死ぬことは間違いないんだから、病気をしないように予防医学、予防治療、どう生きてきたのか、が大事ですね。いろんなことがあったけどいい人生だったと思いたい。やっぱり生きることは戦いだし、『限りなき挑戦』が私のキーワードです」

